

主図版「呉昌碩筆題箋」



# 「落ち穂拾い記」㉜
# 「張遷碑」呉昌碩旧蔵本



図1「天下第一本張遷碑」故宮博物院蔵本




図2「東里潤色」部分比較
A 翻刻本 B 故宮本 C 書道博本 D 近拓本



図3 楊峴の跋文

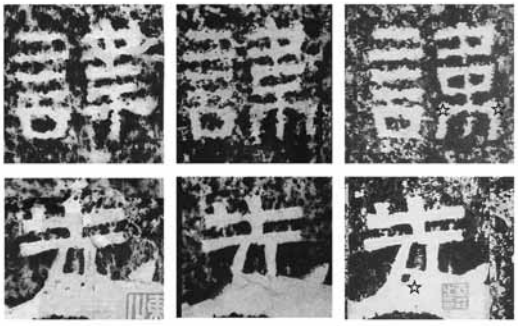



図5「諱」「先」二字比較
☆部分比較





図4 呉昌碩の鑑蔵印と朱筆の釈字

前号で紹介した「張遷碑」は、十七世紀頃に発見され、原碑は山東省の泰廟に置かれている。この碑の旧拓本は、得難い。北京の故宮博物院所蔵の天下第一と称される初拓本が、二玄社からカラー精印されている(図①)。一見すると字画が明確に見えるが、仔細に調べると、原帖に填墨や塗墨された痕跡を多く見る事ができ、相当に加工された帖である。また天下第一本の根拠とされる「東里潤色」の四字を見る事ができるが、この四字も翻刻拓本の字画そのままである(図②)。また金石家・桂馥(1736～1805)の跋も模写されたものである。この故宮博物院蔵の「初拓張遷碑」は疑問のある拓である。現在、張遷碑の旧拓本で、「東里潤色」の四字が未損の拓本の存在は、確認されていない。最良の張遷碑拓は、中村不折旧蔵の書道博物館本と淑徳大学所蔵の旧拓本であろう。前者は戦前から、後者は、戦後影印され刊行されている。中国でもこのレベルの旧拓本は、見たことがない。相当前のことだが、ある方が張遷碑の旧拓本を紹介し、購入を求められた。古い仕覆に入れられた呉昌碩旧蔵の善本であった。装幀も見事で、拓調も良く、やや旧い旧拓の条件を備えていた。題箋が、呉昌碩(1844～1927、名は俊卿、字は昌碩、書画家、篆刻家)の筆であり、巻末には、呉昌碩の師とされる楊峴(1819～1896、字は庸齋、見山、清代の書法家、金石家)の呉昌碩宛の跋文が付されていた(図③、題箋は右頁主図版参照)。また帖中には、呉昌碩の鑑蔵印が数顆おされ、ところどころに呉昌碩と推測される朱筆による釈字が書かれている(図④)。前回の鳴鶴旧蔵本とは比べものにならない善本である。しかし、確かな旧拓の根拠となる巻頭1行目の「諱」と「先」字に関して、「諱」字は旧い状態の字画に近いのだが、丁寧に確認すると拓墨を精巧に加工して、旁の下部の縦画の字画を作りだし、旧い状態にしている(図⑤)。また「先」字は、左下の小さな黒点が破損した状態等から清朝後期、18世紀から19世紀にかけてのやや旧拓である。しかし楊峴は、巻末の跋文のなかで、清初頃の旧拓本であると記している。清末から民国にかけての名家旧蔵のやや旧拓の善本であるが、高価であったので、上述した状況を説明して遠慮したが、いつごろからか、縁あって家蔵に帰している。伊藤滋(書斎名・木鶏室)

# 書のひろば

理事長　下谷洋子

## 公益社団法人全日本書道連盟 第197回理事会開催

（公社）全日本書道連盟の通常理事会が、9月10日上野精養軒にて開催されました。

議事

1.書写・書道教育推進協議会ならびに日本書道ユネスコ登録推進協議会の活動状況について

○第21回ユネスコ無形文化遺産保護条約政府間委員会の開催

11月30日～12月5日の6日間のうちに、中華人民共和国・福建省厦門（アモイ）で、「書道」の登録について決定する予定。

○「書道」のユネスコ無形文化遺産登録決定日に、登録決定の瞬間を見る会を日本芸術院会館で開催する。（ただし、何日になるかは直前にならないと判明しない）

○「SHODOSENSISM―墨エモーション　五感を研ぎ澄ます2DAYS―」

令和9年2月13日・14日、KITTE丸の内1Fアトリウム〝五感で楽しむ7つの体験〟ができる場を予定している。（このイベントには当連盟は「後援」の立場で関わる）

○日本文化協会は、「書道」のユネスコ登録記念として新たな記念仕様のピンバッジをデザインした。（詳細は後日掲載・48ページ参照）




2.令和8年度書写書道教育講演会の報告

・6月4日総会終了後、書写書道教育講演会を開催した。

演題「地域と連携して書道を伝える～学習指導要領の方向性と部活動改革～」

講師　公益財団法人日本国際教育支援協会理事長　藤江陽子氏他2名（聴講者123名）

（講演録を11月頃発行予定の連盟会報に掲載）

3.令和8年度夏期書道大学講座の報告

・8月7日～9日豊島区東池袋のサンシャインシティ・カンファレンスルームにて開催した。

講座内容、担当講師は次のとおり。

8月7日

〈かな〉杉浦華桂先生

〈漢字かな交じり書〉大崎雨萩先生

8月8日

〈篆書〉赤平泰処先生

〈隷書〉加藤　裕先生

8月9日

〈楷書〉江原見山先生

〈行書・草書〉松村博峰先生

今回は延べ297名の受講があった。

今後の事業運営方針案が検討された。

①夏期書道大学講座を2日にしたらどうか

②連盟会員にとっても実のある講習を行いたい

4.令和8年度書道講演会について

日時　令和8年11月18日(水)

14時～15時半

会場　国立新美術館　講堂

講師　大東文化大学教授

成田山書道美術館　学芸員

髙橋利郎先生

演題「書道文化の現在と未来」

5.令和8年度助け合い募金について（11月～12月）

6.助成申請について

3件の助成申請

①第51回全日本高等学校書道教育研究会富山大会

②全日本書写書道教育研究会第66回全国大会(東京)

③「福島県書作家連盟　書道講演会」

7.その他

・事務局会員の交代の報告

・新会員の報告

## 「躍動する明治の書　台北・何創時コレクションの至宝」展開催

10月9日から12月20日まで、大阪市立美術館にて標題の展覧会が開催されます。この展覧会は、何国慶氏によって1995年に創設された財団何創時書法芸術基金会が、昨年30周年を迎えた記念に企画されました。

同会は、明・清時代の書を中心に多数の書画作品を収集していますが、特に本展では、そのコレクションの中でも質・量が充実している明代中期から明末清初までの書に焦点をあてています。約9割の展示作品が日本初公開だそうです。

是非、改めて書の魅力を考える機会としてご観覧下さい。

（12ページ下段を参照ください）

# 競書出品基礎基本講座（臨時(4)）

『この作品をとりあげる』29号（S35年10月）より

編集部

・漢字作品合評

礼子…ねっとりとした作品で面白い良さがあります。

邑水…落款は何と読みますか。

春蘭…ちょっと読みにくいですね。

桑風…これで調和を破りましたね。

春蘭…変化があるようで、バラバラですね。読めない字が多い。

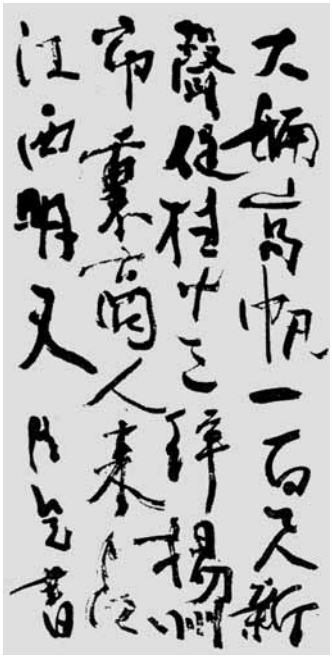
耕堂…流れが無いですね。

扇舟…不器用さと稚拙感は面白いが一貫していない。

礼子…味のあるところがよいですね。

桑風…その味というのに問題がある。

扇舟…字数が26字で詩としたら変だ。



春蘭…何となく変な文ですね。誤字らしいものもある。

耕堂…3行目あたり、とぼけたようで面白い。飄々としているね。

春蘭…何子貞のようなところがあって趣味的ですね。筆力もあるし。

邑水…一寸見がよい。食い込みがあってよいです。墨の香がよい。

桑風…仲々よいですね。書き出しと終わりがよい。

邑水…天の字は周易抄のようでよい。

耕堂…何子貞としてはふっくりさが足りないですね。

芳艸…色々なものを取り入れて、よい才能がある。最後の書の字が惜しい。

## ――基礎基本講座――

・詩文書作品合評

春蘭…画仙紙に淡墨で書いたら面白くなるでしょう。

礼子…素朴で飾り気のない佳作です。

邑水…どっしりとして、作品としてできている。

耕堂…私は春蘭先生とは違って、濃墨でやったらいいと思う。

桑風…これは最初のほうで持っている。

邑水…4行目の強烈の部分がよい。

春蘭…青い、あたりが、たるい。

礼子…筆の変化、散らばりがよい。

桑風…これを大きくすると荒れてくる。これが限度ですね。

邑水…これは異作ですね。一般的なものとは全然違ったものです。

桑風…たいていのものは気持ちが行き過ぎるか、筆が走り過ぎるかの傾向があるが、これは気持ちと筆が一致している。二曲の作品でこれをやったら面白いだろうが…。果たしてどんなものかしら。

礼子…筆は鶏毛かしら。

春蘭…鶏毛じゃないでしょう。

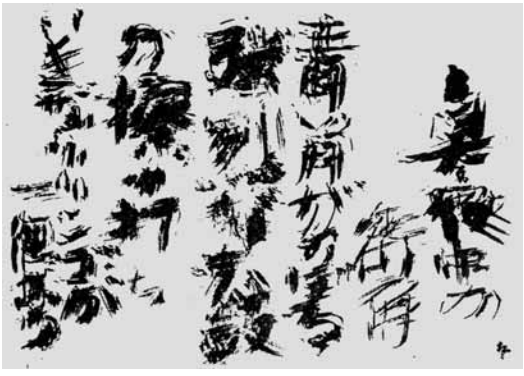
邑水…これは欠点がない。特に終わりの方がよい。額装したらよい。

桑風…よく見るとそれほどでもないですよ。一寸見はよいでしょうが。

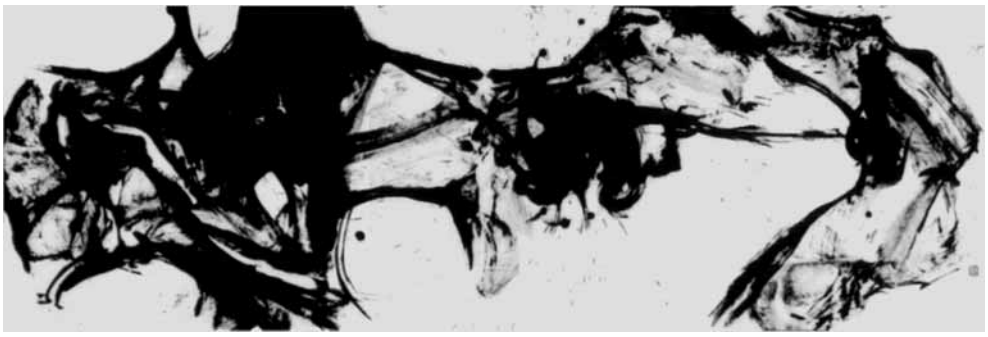
快堂…最初の2行が異質。別の感じがある。その後とそぐわない。

耕堂…同感ですね。

（出席者＝石田耕堂・伊東快堂・香川春蘭・佐久間芳艸・武士桑風　種谷扇舟・中島邑水・満田礼子　以上敬称略）



# 書道芸術院
# 令和の群像（2026）



毎日書道展「万里一空」　　中塩朱華書



## 中塩朱華（宮城）

### 「ピンチはチャンス!!」

何にでもチャレンジさせてくれた母と、物作りが得意だった父に育てられ、近所に書道教室があるからと、何気なく通い始めた。大内魯邦先生の〝青々社〟。進学も先生の勧めで東京の手島右卿先生の学校へ。書の深さも何もわからず〝お習字〟の延長で通い始めた。一日中書き続ける授業、時には、美術で絵を描いたりもした。今それが臨書を書くことに大いに影響していると思う。

卒業後、青々社に戻り、前衛書と出合い〝真っ黒い墨で、太い〟そんな作品を書き続けてきた。しかし、数年後、色はグレー、線は細く墨もサラッとしている。真っ白な大きな紙に点々と墨を置き筆を回転させた作品。光が差し込んだような気がした。千葉蒼玄先生の作品〔セル〕。私の前衛書はその時、生まれ変わった。大内先生から学んだ甲骨文字、楷書、それが基礎となった。古典とは違う表現の仕方を蒼玄先生と、そこに集まる先生方から学ぶことが多くなった。

結婚、出産、育児、介護と走り続けて来たが、今日何枚書いたから、お稽古に行けたから…と書道をすることで充実感を得られる日々だった。公募展の度、淡墨か濃墨か、太くするか細くするか、紙は何を使うか、思い通りにはならないが、一本の筆が作り出すさまざまな表情が楽しくて書き続けている。毎月の競書課題を書くことで筆遣いを学び、作品展に足を運び、色々な角度から、自分の求める作品が書けるまで、この手が筆を持てる限り、続けていきたいと思う。両親の体調が悪くなり追い詰められた気分の時、負けないように、書に取り組むことで時を過ごし「万里一空」という作品ができあがった。この作品で「毎日賞」を受賞することができてとても感謝しております。いつも近くにいてくれる生徒の皆さん、研究会でご指導いただいている先生方、本当にありがとうございます。

月華社の生徒の皆さん、これからも一緒に、切磋琢磨しながら、全力を尽くし、楽しく書に親しんでいきましょう。

# 書道芸術院
# 令和の群像（2026）



第79回書道芸術院展「揺らぎ」　　佐々木 祐 子 書



## 佐々木 祐 子（青森）

### 「温故知新」

午前1時、師、名久井裕三先生宅のお稽古場にて。この日は前衛作品制作日。仕事終わりの午後8時頃から生徒が集まりだして、既に2人は作品が完成し帰宅し、残りは先輩方を含め6人ほど。前衛書の新人の私は、次は誰が書くのかと周りを気にしながら小さな原稿を握り締め、何度も筆の動きを頭の中で順を追ってその時を待つ。先生がグラス数個と日本酒一升瓶を持ってきて。先ほどまで無口でピリッと張り詰めていた雰囲気が穏やかに変化し、だんだんと皆さんも饒舌に。楽しげな談笑が広がってきたところで、先生が「次、書いてきて」と促してくださった。

先生宅の庭に出て制作開始。寒いとか暗いとかよりもただただ緊張し、一筆目が入らない。どうやって書いたのかも覚えていないほど。やっとの思いで書き終わり、息苦しさのまま、先生にお声がけをして見ていただく。「どれどれ」と先輩方が次々と外に出てきて、沈黙の中、先生の「いいでしょう」の一言で深呼吸。「良かったね、できたね。」の言葉をかけてもらい、動悸も次第に収まってくる。

あれから約半世紀。今は自宅で作品制作をしているが、書き始めの緊張は変わらない。都度、難局に立ち向かっている。

以下は故・名久井先生の言葉。

個性を尊重すること。新しい書を創生すること。そのためには古典臨書研究を継続し怠らないこと。思いの捉え方は、形の意識で「記号」、行動の意識で「線」、内容の意識で「質」となる。それが一体不離となったのが書である。

形を構成する線に質を伴った時に書が生まれる。何を伝えたいか表現したいかを追求していく過程が重要、という教えを忘れることなく、いつも念頭に置いて稽古している。

温故知新。古典にはその時代を生きた書者の、詩や賦に託した書の根底からの感動がある。文字の大小強弱、リズムと流れ、呼吸、バランスと空間など、古典から学んだことをどのように生かしていくか。墨色、素材、用具などにもこだわりを持ち「今」を生きる証しとして表現することがこれからも課題であると思っている。心の迷いは筆遣いに表れるから、決断をするまでは何日も思い悩むが「書きたい」と心が動いた時に、気を張りつめたタイミングの一瞬を掴んで書き上げる。前衛書は最新の気持ちを表すことができると思う。

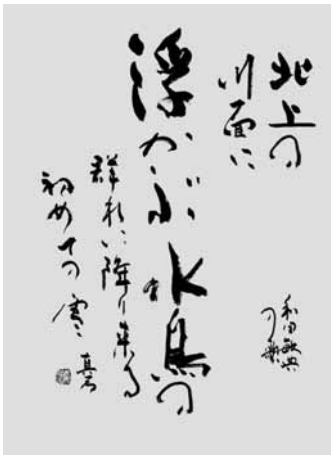
これまで長い間、書の世界に身を置くことができたのは、恩師、先輩方、仲間、家族、友人の理解と協力と支えがあったからこそ。感謝の気持ちを抱き、納得いくまで書を継続できればと願っている。

# 令和8年度 新審査会員作品

## 高橋 真弓・藤崎 松月・和田 敬子・金延 憲市



高橋 真弓
（宮城）



「和田敏典の歌」

この度は審査会員にご推挙頂きありがとうございます。坂本素雪先生と伊呂波書の会の先輩方に心より感謝申し上げます。書道を始めたのは小学2年生、ふるさとの風景を思ってこの作品を書きました。素雪先生からいただいたご指導を糧に、これからもより一層精進して参ります。（真弓）



和田 敬子
（群馬）



「再生」

この度のご推挙、誠にありがとうございます。真下京子先生のご指導と良き書友の支えのお陰と感謝申し上げます。

現在「時」をテーマに制作しています。時間は終わりのない循環の中に存在している。これを「再生」と捉え、新たに踏み出す瞬間を表現しました。感性を磨き自分らしい前衛書を志向し精進して参ります。（敬子）



藤崎 松月
（千葉）



「飛」

この度は審査会員にご推挙を頂きありがとうございました。板垣洞仙先生には、幼い頃より長年に渡りご指導をいただき、かけがえのない経験となりました。先生が繋いでくださった「前衛書」の縁を大切に、書道芸術院の皆様とともに、これからも書に親しみながら一層精進して参ります。（松月）



金延 憲市
（大阪）



「飛」

この度は、審査会員にご推挙いただき誠にありがとうございます。これもひとえに書道芸術院の先生方、師、書友の仲間達のおかげです。心より感謝申し上げます。

小林琴水先生率いる春洋会では、大字書への学びも深めております。今回は一字書で「飛」を書かせていただきました。今後ともご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。（憲市）

# 令和8年度 新審査会員作品

## 三浦 小樹 ・ 逸見 玲子（か） ・ 上野 千琇（現） ・ 相内 沙莉（前）



三浦 小樹
（千葉）



「養神保寿」

この度は審査会員にご推挙頂き誠に有難うございます。
書道芸術院、白扇会の諸先生方より書に向かう真摯な心を学ばせて頂いております。
古典研究会で古典の奥深さを仲間とともに学び、展覧会を通して自分の書に向き合い切磋琢磨しあう家族がいることに感謝し、これからも自分の目標とする書に近づけるよう精進して参ります。（小樹）



上野 千琇
（宮城）



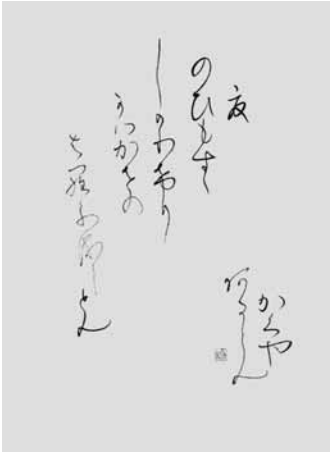
「山口誓子句」

この度は審査会員にご推挙頂き誠にありがとうございます。これも故・新藤翠吟先生、そして現在ご指導頂いている飯沼恵鳳先生はじめ宮城野書人会の先生方、書友の皆様のお陰と心より感謝申し上げます。
今後は感動してもらえる作品を書けたらと思っております。これからもご指導頂きながら精進して参りたいと思います。（千琇）

◇



逸見 玲子
（群馬）



「夏の日も」

この度は、審査会員にご推挙いただき、ありがとうございます。下谷洋子先生、勝山初美先生はじめ書泉会の先生方のお陰と感謝申し上げます。
作品は「香紙切」を基にし、特徴である細く鋭くリズム感のある連綿に留意して書きました。今後も、古典を学び、精進して参りたいと思います。（玲子）



相内 沙莉
（東京）



「端虚」

この度は審査会員にご推挙いただき誠にありがとうございます。これもひとえに師匠の工藤永翠先生、諸先生、先輩方の温かいご指導のおかげと深く感謝申し上げます。仲間と書を続けられる環境に感謝し、「端虚」の精神を胸に、一層精進してまいる所存です。（沙莉）

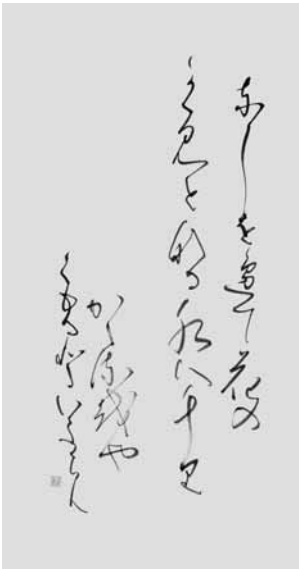
# 新　鋭　礼　讃

かな部　審査会員候補　　大　﨑　友里絵（群馬県）



所属　書泉会（松村会）
師名　下谷洋子
　　松村くに子

参加している書展
毎日書道展・群馬県書道展覧会・書泉会展



「年をへて」

年をへて花のかがみとなる水はちりかかるをやくもるといふらむ

**作品自評**

かな作品を本格的に書くようになった頃は、先生からお手本をいただき書くことが多かったです。自分で創作をするようになって初めて、どんな文字を使って書くか、周りの文字とのバランスや墨色といったことに配慮するようになりました。今回の作品は現在勉強中である『関戸本古今集』より歌を選び、漢字や変体がなをどう使っていくか、全体の配置はどうするかを決めました。字の形を考えたり、どこに盛り上がりをつけたりするかなど悩みながら創作しました。作品に取り組んでみて線に変化を出せず、ダラダラと書いてしまいメリハリがないことを改めて痛感し、そのような苦手な点を意識しながら書き上げました。

**書活動における課題**

自評にも書いた通り、古筆の勉強が浅く、古筆の字形や流れ、変化がどのようであるかなどを臨書によって理解したいと思います。また、拡大臨書なども増やして学んでいけたらと思います。

**今、伝えたいこと**

小学生の頃、習い事で始めた書道を細々とではあるものの続けることができています。これも指導していただいている下谷先生、松村先生、書泉会の先生方のお蔭と感じています。以前姉も『新鋭礼讃』に掲載していただきましたが、なかなか練習時間が取れない時でもお互いを励まし合いながら取り組めたらと思います。

前衛書部・審査会員候補　　藤　﨑　桜　花（千葉県）



所属　洞書会
師名　板垣洞仙

参加している書展
毎日書道展・長野県現代書藝全国展



「『犬』 による」

**作品自評**

今回「犬」という文字により前衛書で表現いたしました。我が家にはふたりの愛犬がおります。生きる上で大きな支えとなってくれている家族を思って、生命の躍動感が伝わるよう心掛けました。師の故・板垣洞仙先生からはいつも「余白の美」「白と黒のバランス」を考えて書くようご指導いただいてきました。今回の作品が少しでも皆様の心に響くものであったら幸いです。

**書活動における課題**

今後の活動における一番の大きな課題は尊敬する師が亡くなったことです。2026年3月、13歳より師事して参りました先生が急逝されました。思い返せばこれまで、古典の研究のみならず、書に必要な道具の数々まで先生の御指導なくしてやってはこられませんでした。本当の意味での「自己研鑽」が必要不可欠とひしひしと感じております。

**今、伝えたいこと**

尊敬する師を喪い、今回の作品を制作するにあたり諸先生方のご指導、また同輩たちの協力やアドバイスなしでは途中で挫折していたに違いありません。先生を中心として書を続ける中で沢山の方々の温かな御心に触れて参りました。この場を借りて改めて深く御礼申し上げます。

「新鋭礼讃」は不定期の掲載になります。本院・無監査以上の方で掲載を希望する方は、ぜひ院事務所まで連絡してください。

# 令和8年度第60回書道芸術院
# 単位認定講習会（鳥取）報告

**会場**＝エースパック未来中心（鳥取県立倉吉未来中心）
**期日**＝令和8年8月22日（土）～8月23日（日）
**主管**＝山陰支局（支局長　名越蒼竹）

**単位認定講習会**

第60回書道芸術院単位認定講習会は14年ぶりに鳥取県で開催された。会場は鳥取県のほぼ中央に位置する倉吉市の多目的文化施設エースパック未来中心で、2025年に開館した鳥取県立美術館に隣接する場所にある。本年度も前年度同様2日間の日程で行なわれた。

今回は全国中学校総合体育大会の時期と重なったため、県外からの受講希望者には宿泊の予約が困難な状況となったのが残念であった。

開講式では、主催者として下谷洋子理事長よりご挨拶、小竹石雲常務理事より激励のお言葉をいただいた。



開講式　理事長下谷洋子先生挨拶

**講習会概要**

**第1日**

**書道芸術院史**　**下谷洋子先生**

本院の誕生から今日までの80年の歩みと近年の主な事業を詳細にお話いただく中で、「書は芸術」という芸術院の根幹と5部門体制という他の書道団体には無い特色を知ることができた。

毎日書道展役員の3名の先生による作品解説では、作品作りにかけた思いをお聞きすることができ、有意義な時間となった。



「院史」下谷洋子先生解説

**篆刻・刻字**　**大沼樵峰先生**

来年の干支の「丁未（ひのとひつじ）」を既に字入れした印材でご準備していただいたおかげでスムーズに彫り進めることができた。印刀の持ち方や、どこから彫り始めるのかについて説明を受け、白文を彫りはじめた。受講者は普段握ることのない印刀に不慣れだったが、講師の先生の丁寧なご指導と補助に入られた先生方のご指導・サポートにより時間内に彫り上げることができた。


大沼樵峰先生　講義風景


大沼樵峰先生　実演指導

**現代詩文書**　**小竹石雲先生**

書きたい言葉にふさわしい効果的な表現にするためのポイントを、実例を挙げながらご教示いただいた。「紙と筆のなじませ方に個性が出る」というお話が強く印象に残った。課題は「素朴さ」をイメージしての作品作り。普

段日常的に書いている文字を作品化することの難しさに多くの受講生が直面したが、構成や文字の大きさ、筆の動きなどを試行錯誤しながら作品を仕上げることができた。



小竹石雲先生　講義風景


小竹石雲先生　実演指導

**前衛**　　**千葉蒼玄先生**

前衛とは何かという話から始まった。受講者はそれぞれが思う「一本の線」を書き、「常識を取り去る」をテーマに説明を受けた。先生によるダイナミックな席上揮毫では、迫力ある筆運びに圧倒され、受講者の目は釘付けになっていた。

一本の線を書くというシンプルな行為にも、さまざまな表現方法があることを知り、「常識を取り去る」ことの難しさを実感しつつ、苦戦しながらもそれぞれに試行錯誤し、創作に向き合っている様子が見られた。

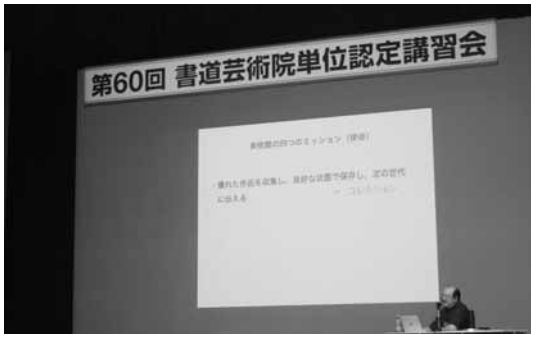
**一般教養**

**鳥取県立美術館長　尾﨑信一郎先生**

昨年倉吉市に開館した鳥取県立美術館の、開館に至るまでの経緯や現在行っている事業を解説していただいた。

他団体との連携にも力を入れており、それによって昨年12月開催の「全国代表書作家展」が実現したという話も伺った。今回、その作家展後に美術館に寄贈された作品を鑑賞する時間もあり、美術館が地元にできたことによって良い作品に触れる機会が増えることを実感した。





尾﨑信一郎先生　講義風景


千葉蒼玄先生　講義風景


作品鑑賞風景


千葉蒼玄先生　揮毫風景

**懇親会**

初日講習会後、倉吉シティホテルで懇親会が開かれた。来賓と主な役員以外は、くじ引きによる席で、講習会の参加者、山陰支局のスタッフが混じっての配置で交流した。

歓談しながらの晩餐でほどよくお腹を満たしたところで、ビンゴゲームが始まった。デジタル機での効果音のもと、講師の先生からいただいた書作品や筆や画仙紙の提供、Tシャツ、マンガ王国鳥取のコナンや鬼太郎グッズ等の賞品をめぐって大いに盛り上がり懇親を深めた。



懇親会歓談風景

**かな　　下谷洋子先生**

筆の持ち方から基本線について、字形、連綿、行の流れなど、かなの基本や古筆の見方についてお話をいただいた。かなは、形も大切であるがリズムも大切との説明があり、そのお話を踏まえて、高野切第一種の臨書に取り組んだ。



下谷洋子先生　講義風景



かなの講義風景

**原拓書道史　　講師　名越蒼竹先生（代）**

会場に入ると、種谷萬城先生が所蔵されている貴重な原拓が時代順にずらりと展示されており、皆が解説に耳を傾けながら対象となった原拓に近づき、目を凝らして鑑賞していた。印刷物でしか目にすることが無かった実物を間近で見ることで、それぞれの時代の特徴や書体の変遷がよくわかり、書道の基本である古典への学びを深めるよい機会になった。



名越蒼竹先生　講義風景



名越蒼竹先生　講義風景

**漢字　　川島舟錦先生**

作品化の際にリズムや表情をつくる観点として、線の太細・墨の濃淡・余白の作り方が大事になると指導いただいた。大きな筆による模範揮毫では、作品が仕上がると会場から「おー」と感嘆の声が上がった。課題は漢字4文字までの作品作りで、多文字に慣れている受講生にはとまどいもあったが、筆を2本、3本まとめたり墨の濃さを変えたりなど各自が工夫して取り組んだ。



川島舟錦先生　講義風景



川島舟錦先生　揮毫風景

閉講式では、単位認定証の授与が行われ、理事長下谷洋子先生より全体の講評をいただいた。その後受講者を代表して早部朗さんが謝辞を述べ、続いて次回開催地である東北（仙台）への引継ぎが千葉紅雪先生へ行われ、2日間にわたる講習が無事に修了した。

受講者の皆さんにとって、この度の講習会で学ばれたことが今後の活動における大きな糧となることを願うとともに、遠路参加くださった受講者の皆さんのご協力、そして熱心に指導くださった講師の先生方に心より感謝申し上げ、報告とします。

〈報告者　山本龍堂・吉信菊水〉



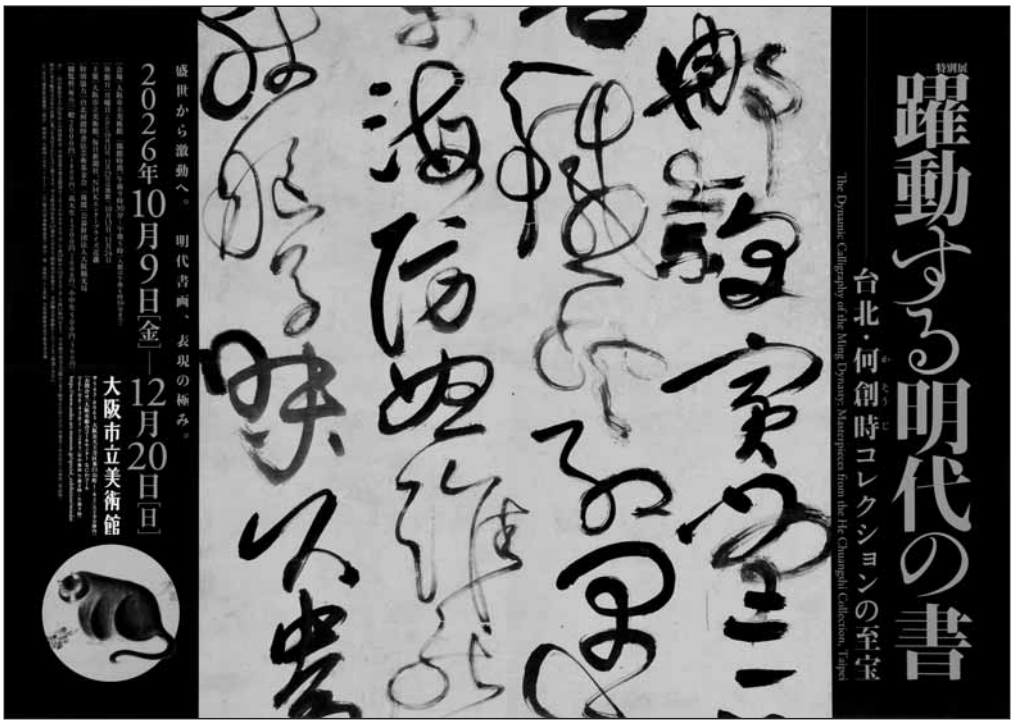

閉講式　理事長下谷洋子先生挨拶・講評



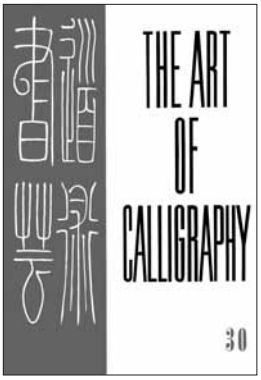

次回開催地東北総局の千葉紅雪先生ご挨拶



受講生代表　早部朗さん謝辞



# 『書道芸術』クロニクル（7）第30号




発行日　昭和36年（1961）6月1日
編集兼発行人　印刷　価格は同じ
　送料10円
総ページ　A5版36ページ　表紙含む
口絵写真　第14回書道芸術院展作品5点
　研究部優秀作品8点
手本揮毫　種谷扇舟・武士桑風・香川春蘭
　千代倉桜舟・多田観山
　加藤翠柳・川崎梅村
　比田井抱琴・山本聿水
競書成績　研究部…特選5秀作22人選15
　条幅部…39名（師範・準師＋1～10級）
　規定部…272名（師範・準師範・二・初段
　　＋秀・優・特～10級）
　随意部…250名（師範・準師範・二・初段
　　＋秀・優・特～10級）
　臨書部…140名（師範・準師＋特～10級）
　篆刻部…4名（1・6・9・10級）
競書短評　研究部9名（写真版は口絵に）
　規定部31名（写真版は16名）
　随意部33名（写真版は16名）
　臨書部28名（写真版は10名）
　条幅部19名（写真版は8名）
　篆刻部4名（写真版は3名）
記事　①第14回書道芸術院展
　②連載「硯の話」5
　③この作品をとりあげる
　④現代詩・書展
　⑤臨書講座15
　⑥第2回師範試験、昇段級試験
　⑦会報

【解説】（文中敬称略）

29号（S35年10月号）を発行してから8か月を経過しての発行である。既報の通り、前年度から会員不足のために発行に遅滞が生じていたが、ここで半年以上のブランクが生じた。資金不足への対応として、サイズを小さくし、紙質を落とした。わら半紙に近い紙質で、60数年経過した現在、保存状態は良いとは言えず、ページを繰るのにも気を遣ってしまうほどだ。あわせて表紙が変更された。横書きで時代の志向が感じられるデザインだ。

①の総評は武士桑風。「書壇でただ一つの総合展」として「新しい天地を開拓している」と総括する。ただし、かな作品の少なさを最大の課題とした。第一科の評で種谷扇舟は、「空虚」「前進の姿がない」「勉強不足」の語を使って奮起を促している。第二科は大賞作もあり、「一番見ごたえがあった」と香川春蘭が会員の頑張りを称えた。第三科（篆刻）の伊東快堂は「他の会とは違った新鮮で生きている篆刻」だと評価する。第四科（臨書）は「特にすぐれた作品は見当たらなかった」とする。評者の中島邑水の「臨書の意義は、古人の遺した呼吸の深さを知り、腹のすわりを感得し、生きる力を悟ることにある」という言は現代でも耳を傾けるべきだろう。第五科は新設の近代詩文部。第二科から独立させた。作品の読みやすさだけにとらわれず、「読みにくいが現代的表現である」ものへシフトしていきたいという種谷扇舟の思いが伝わる文章だ。

②は藤本竹香の連載。今後、機会を捉え内容を紹介できたらと思っている。

④は前年秋に銀座の松屋で開催された2回目の書展。会派にとらわれず、金子鷗亭や飯島春敬らの大家に加えて本院の幹部も多く参加した。詩の内容や文学性を作品に入れ込むべきかどうか、という問いかけもあった。

前号まで講座は8種類あったが、臨書講座のみを残した。⑤は中島邑水による王慈の解説と作例を掲載。⑥の師範試験は不合格者に対し、競書の段級を与えると明記された。昇段級試験は規定・随意・臨書・篆刻の4部門。（受験料は各100円）

なお、この号から希望者に競書作品の添削をすることになった。

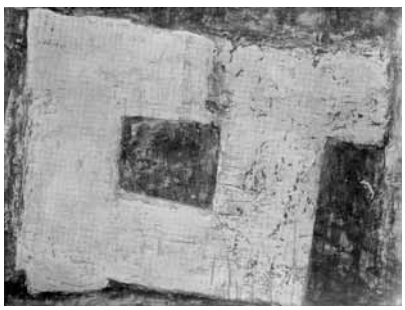


表　立雲



伊東　快堂

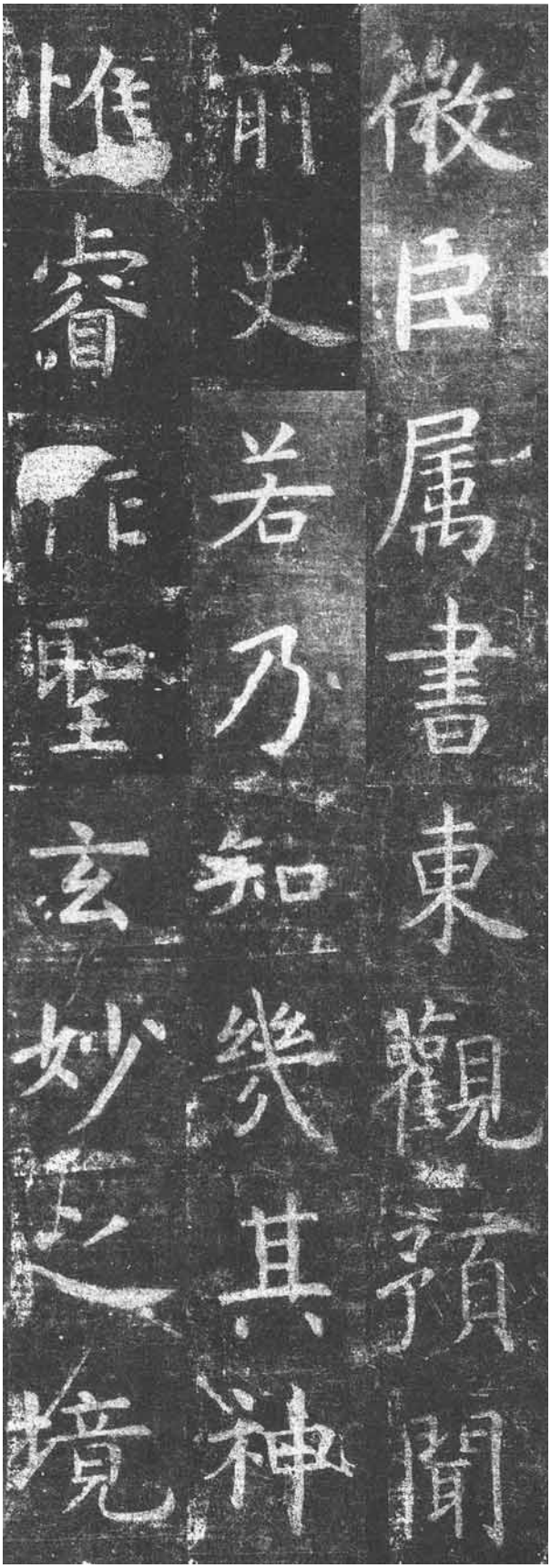
古典鑑賞 497

# 孔子廟堂碑（虞世南）①

**漢字研究部臨書課題** ＝（半紙普通判・縦使用）左記掲載部分より何文字臨書してもよい。

**特別研究部臨書課題** ＝（A、大作の部―毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可　B、小品の部―半切1/3以上半切以内、全紙1/3以内も可（A・B縦横自由））当該古典の左記掲載部分以外も可。

**※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）**




微臣屬書東觀。預聞／前史。若乃知幾其神。／惟睿作聖。玄妙之境

（三井記念美術館蔵）

〈解説〉唐の太宗は長安の国士監に孔子廟を修築したが、それを記念して建てられたのが孔子廟堂碑である。太宗の勅命を受けて虞世南が文章を作り自ら揮毫した。国家事業であるため、最初から最後まで尋常ではない緊張感をもって書き上げたと推測される。虞世南70歳代前半の名跡で、現在でも欧陽詢「九成宮醴泉銘」と並び称されている。

立碑後、間もなく火災に遭い、則天武后の時代に重刻された。多くの翻刻本があるが、主なものに宋代の陝西本（西廟堂碑）、元代の城武本（東廟堂碑）がある。図版として多く使われているのは、清代の李宗瀚（りそうかん）に伝わった臨川李氏本（りんせんりしぼん）である。これは日本の三井聴氷閣（ていひょうかく）に伝わって、時折公開されることがあり、実物を目にすることができる。（編集部）

※掲載図版原寸、ただし行立てについては変更しています

古筆鑑賞

271

# 藍紙本万葉集（伝 藤原公任筆）①

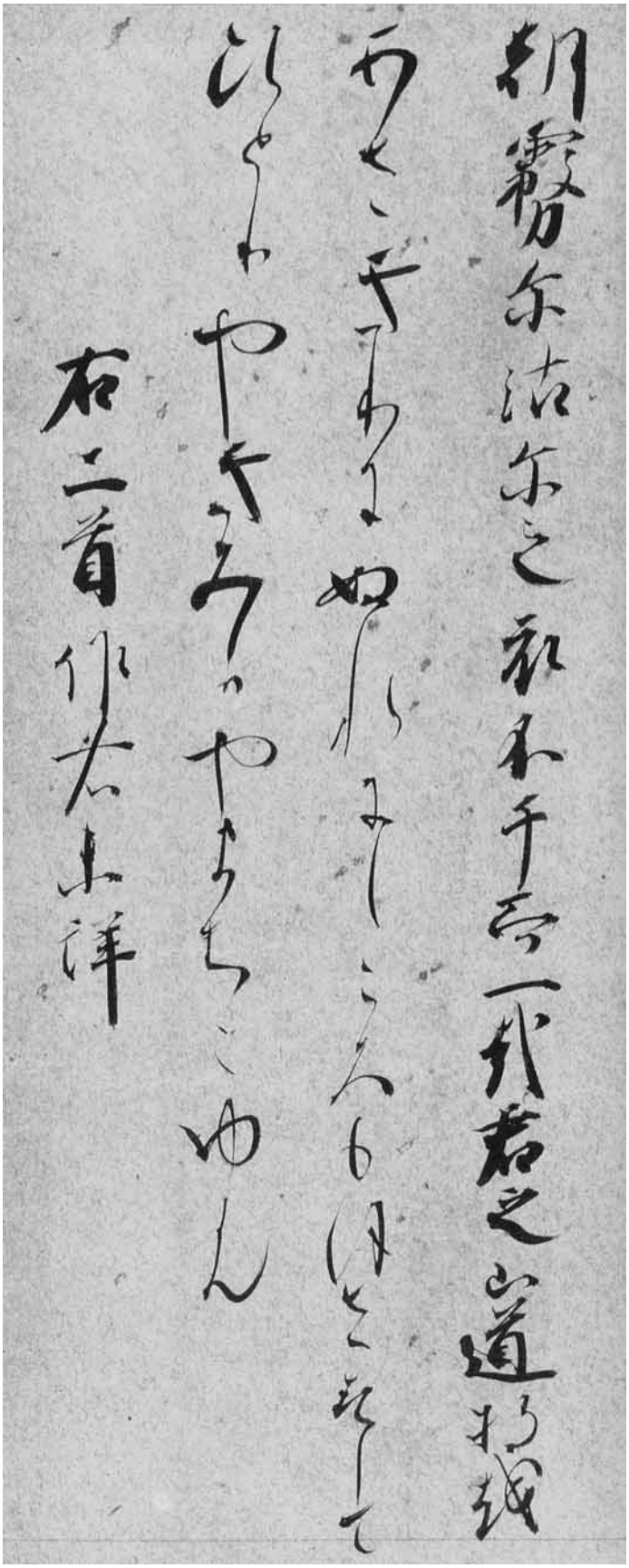
〈よみ〉

朝霧尓（ゆ）沾尓之衣不干而一哉君之山道将越
あさぎりにぬれにしころもほさずして
ひとりやきみがやまぢこゆらむ

右二首　作者未詳。

〈解説〉『万葉集』の成立過程は不明であり、大伴家持と橘諸兄が関わったはずであるが、両者ともに子孫が政治的事件を起こしたために、当初この集が広く読まれることはなかった。平安時代になって、藤原政権が安定すると、歌学が勃興し、古歌の需要が高まったため、万葉集の重要度が増していく。写本も多く作られ、その中の桂本・金沢本・天治本・元暦校本・藍紙本を「五大万葉」と呼ぶ。今回は「藍紙本（らんしぼん）」を取り上げた。いわゆる万葉がなで歌を表記し、その読み方をかな書きで併記するスタイルが一般的である。図版1行目が原歌で次の2行がその訓読、最後が左注である。

（編集部）



京都国立博物館蔵　　※掲載図版原寸

**かな研究部臨書課題**

（半紙普通判（料紙可）・縦長に使用）別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。左記の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。**（全臨も可）

**特別研究部臨書課題**

A. 大作の部＝毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部＝半切1/3以上、半切以内（縦横自由）
〈いずれも左記の掲載以外も可。〉

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）

※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

漢字規定　初段以上　【11月15日締めきり】　用紙　半紙普通判

小竹石雲選書



萬馬奔騰　よみ（万馬奔騰）

書体＝自由

## 習い方解説　(1)

小竹石雲

**萬馬奔騰**　〔四字熟語〕
（万馬奔騰）

多くの馬が走ったり跳びはねたりしている。はつらつとして勢いが非常に盛んなこと。

木簡隷の持つ素朴性、自在性、伸びやかさを基調とした表現を試みた。複雑な字と、簡単な字とが交互にあるため比較的まとめやすく、表現のバリエーションも広がる。平易で安定感のある文字造形と落ち着いたリズム感でもって素直に書いてみた。

参考例では少し発展させ、自由な動きを取り入れ線の太細、長短、方向に変化をつけてみた。筆先に気持ちを乗せて気と筆の動きが一体化できた線は余白が輝き、楽しく書ける。

〈参考〉



漢字規定　秀級以下　【11月15日締めきり】　用紙　半紙普通判

半田藤扇選書




鳥歌花舞　よみ（鳥歌い花舞う）

書体＝楷書に限る

## 習い方解説　(1)

半田藤扇

**鳥歌花舞**　〔欧陽脩〕
（鳥歌い花舞う）

鳥がさえずり花が風に舞うように咲き誇る。生き生きとした春の美しい自然の情景。

楷書の中で一番温雅で上品な書といえば、「孔子廟堂碑」です。その穏やかな、美しく伸びる縦線と整った少し右あがりの横線のバランスが絶妙で実に優雅な趣きを醸し出す書風ではありませんか。

また、左右の縦画が、外側にゆるやかに膨らむように、「外柔内剛」を意識して書いてみて下さい。

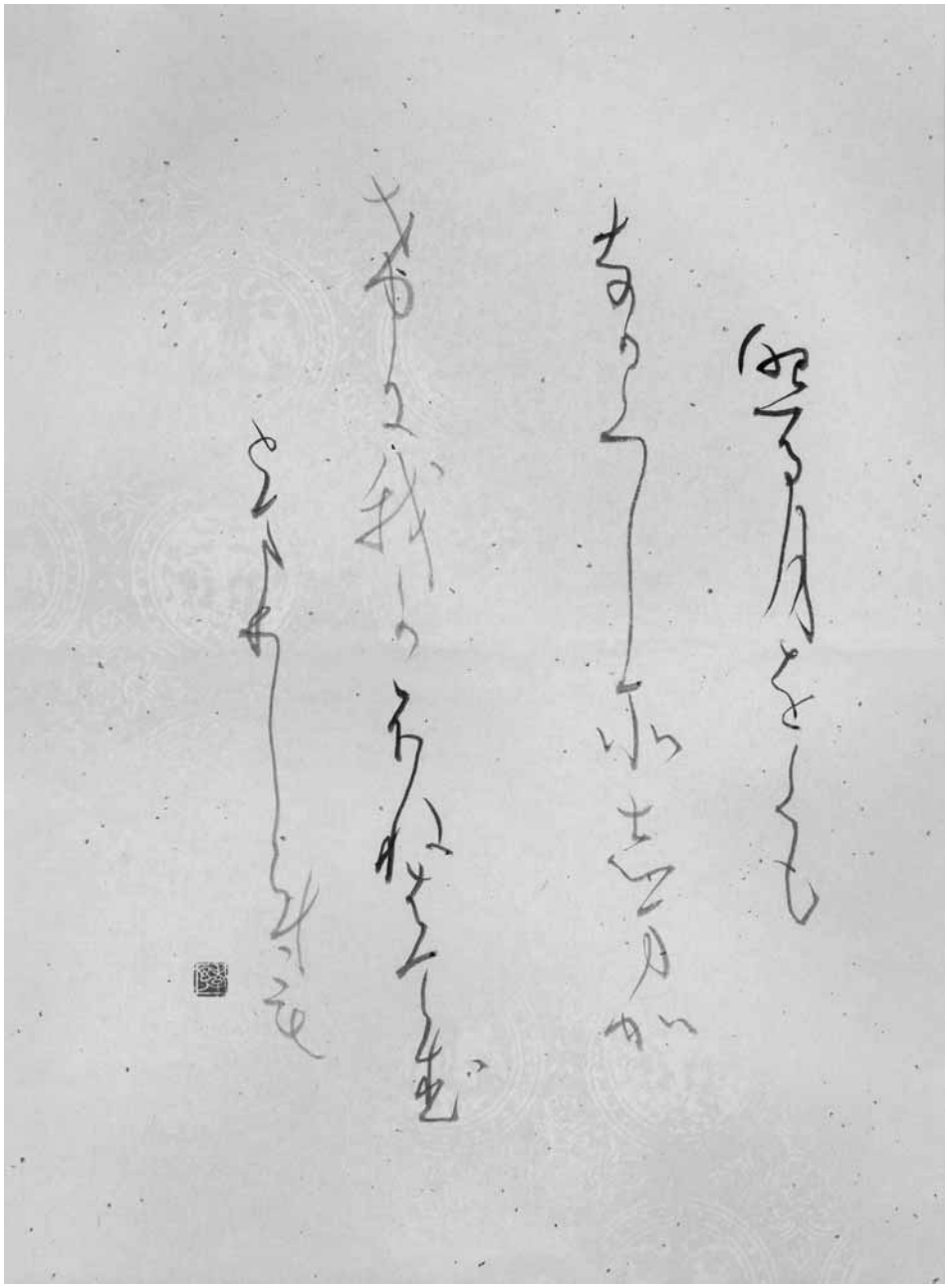
向勢という言葉があります。それは、向かい合う縦画がやや外側に膨らむような優美な曲線を描く。丸みとあたたかみのある書風です。

さらに、造形は縦長で、角張った鋭さはなく、自然体で書くのが一番理想的です。文字はゆったりとしたリズムを生み出すように運筆しましょう。

※羊毛筆を使用

かな規定　初段以上　【11月15日締めきり】　用紙　半紙普通判（料紙可）

小島孝予選書



よみ方　照る月を雲(久も)な(奈)隠(可久)しそ(所)島(志万)陰(加希)に(尓)
我が(可)船(不ね)泊(者)てむ(武)泊(と万)り(利)知(し)らず(寸)も(毛)

創作

＊料紙は半紙版(33.0×24.5㎝)を使用しましょう。半懐紙は上記のサイズに切って下さい。

## 習い方解説　(1)

小島孝予

**照る月を雲な隠しそ島陰に我が船泊てむ泊り知らずも**

〔春日蔵「万葉集」〕

照る月を雲よ、隠さないでくれ。島陰に私の船を泊める、その場所が分からないから。

万葉集の歌を4行の行書きで表現しました。

行書きはおのずと行が直線的になりますが、単純にならないように、横に張り出す画や縦に伸びる文字などの組合わせによって「行の揺れ」を生み出すことが大切です。

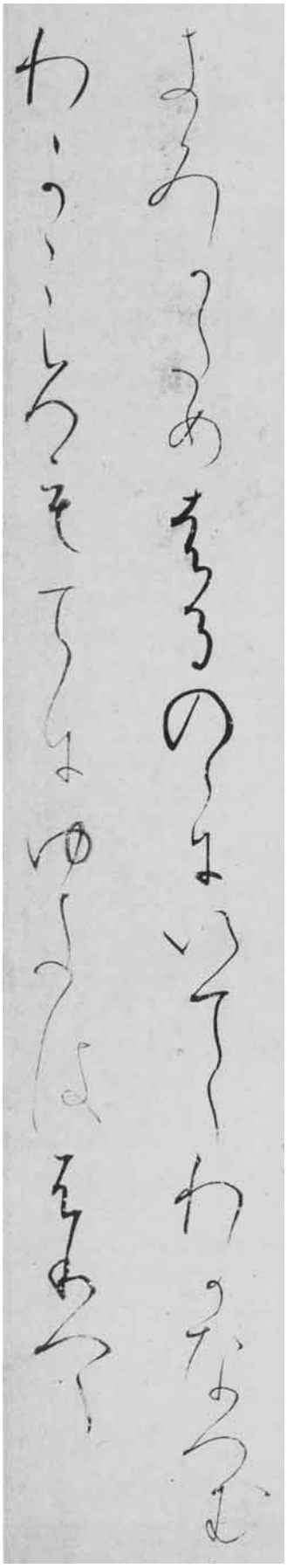
また行間は定規ではかったような等間隔ではなく、行の響き合いと全体のバランスを考えながら決めていきます。

上級者の方はこれを基にして発展させ、散らし書きに仕上げてみて下さい。

作例の墨継ぎは「不」です。

**かな規定　秀級以下　【11月15日締めきり】**　用紙　半紙タテ1/2（**料紙可**）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を**臨書**する。**部分臨書**も可。〈注〉署名は「○○臨」。　高野切第一種（掲載写真原寸）



よみ方　きみがため（支可多者）はるのゝに（毛尓）いでゝわかなつむ
わがころも（可）でにゆきはふり（支尓不利）つゝ

歌意　あなたのために春の野に出掛けて若菜を摘む、そんな私の袖に雪が降りかかってきて……。

**かな条幅規定　【11月15日締めきり】**　用紙　小画仙紙半切（**料紙可**）



佐藤希雲選書

よみ方　限（かき利）な（那）き（支）君が（可）た（多）め（免）に（二）と折（を）る花は（八）
時しも分（王）か（可）ぬ物（もの）に（尓）ぞ（曽）有け（介）る（留）

創作

**※タテ形式に限る**

## 習い方解説　(1)

佐藤希雲

**限（かぎり）なき君（きみ）がためにと折（を）る花（はな）は**
**時（とき）しも分（わ）かぬ物（もの）にぞ有（あり）ける**

〔読人しらず「古今集」〕

諸説あるようですが、造花を贈った際の歌とされています。

「限なき」は「限りなき」でも、また「有ける」は「有りける」でもよいです。もちろん全てをかなにしても大丈夫です。丁寧に書きつつも時折は速く運筆するのが大切です。意識すればできるはず。

漢字条幅規定　初段以上【11月15日締めきり】　用紙　小画仙紙半切



千葉蒼玄選書

**風林落葉秋聲動　露草鳴蛩夜氣涼**　〔呉寛〕
（風林の落葉秋声動き　露草の鳴蛩夜気涼し）

書体＝自由

## 習い方解説　(1)

千葉蒼玄

行書は、日常最も親しく用いられる書体であるがゆえに、筆者の気質や修養、さらには筆癖までもが最も率直に表れる書体である。

ことさらに奇を衒うことなく、平易な字形とし、連綿をできるだけ避け、一字一字を端正に立たせることを心がけたが、形を整えることはできても、古典に息づく格調や気韻はなかなか現れない。古典の精神が自然と筆端に滲み出て初めて備わるものである。

**※タテ形式に限る**

漢字条幅規定　秀級以下【11月15日締めきり】　用紙　小画仙紙半切



西川翠嵐選書

**秋風起兮白雲飛**　〔白居易〕
（秋風起こって白雲飛ぶ）

書体＝自由

## 習い方解説　(1)

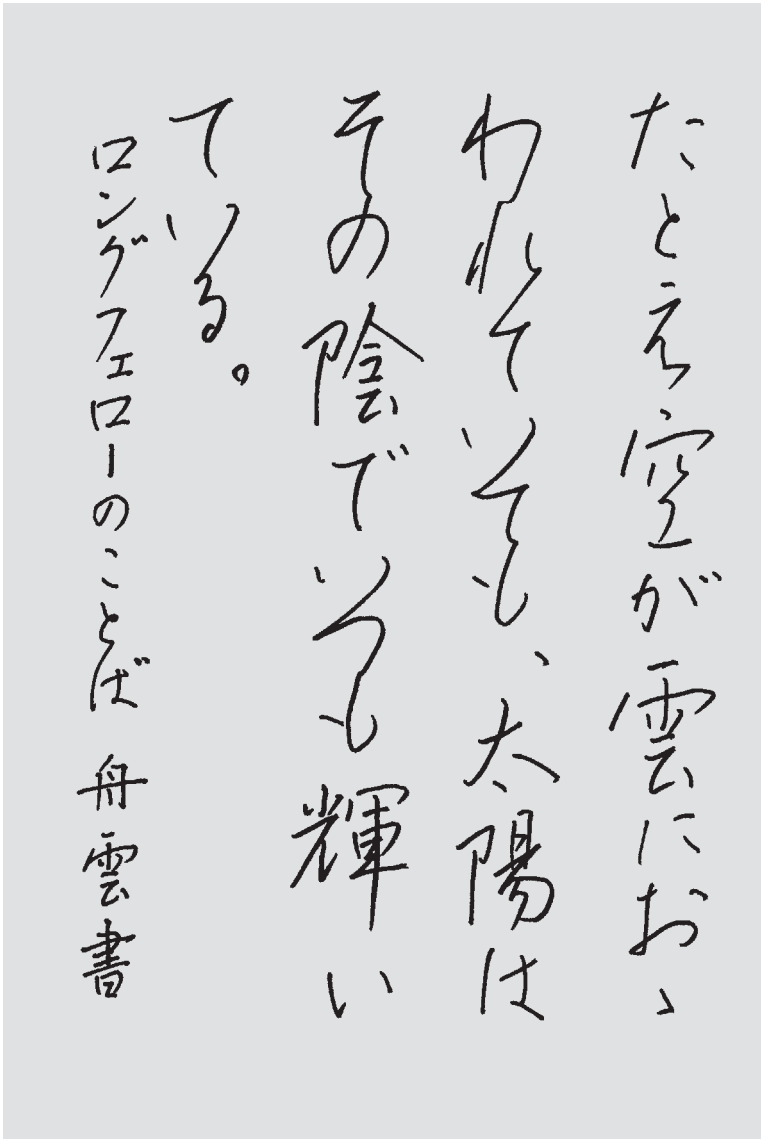
西川翠嵐

秀級以下ですので、はじめての条幅という方もいるかと思います。無理のない行書で1行書きとしましたがあくまで参考手本ですので臨書のように書く必要はありません。皆さんの独創性に期待します。

様々な表現方法があると思いますが基礎基本も大切です。正しい字形、安定性、全体のバランスを考えて取り組んで下さい。

ペン字規定【11月15日締めきり】

広瀬舟雲選書




書体＝自由

◇用紙　ハガキ大（14.8×10㎝）の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用（ボールペン・フエルトペン可）

**ご注意!!**
用紙の大きさにばらつきが見られます。
用紙サイズ（ハガキ大14.8×10㎝）を守って下さい。

## 習い方解説 (1)

広瀬舟雲

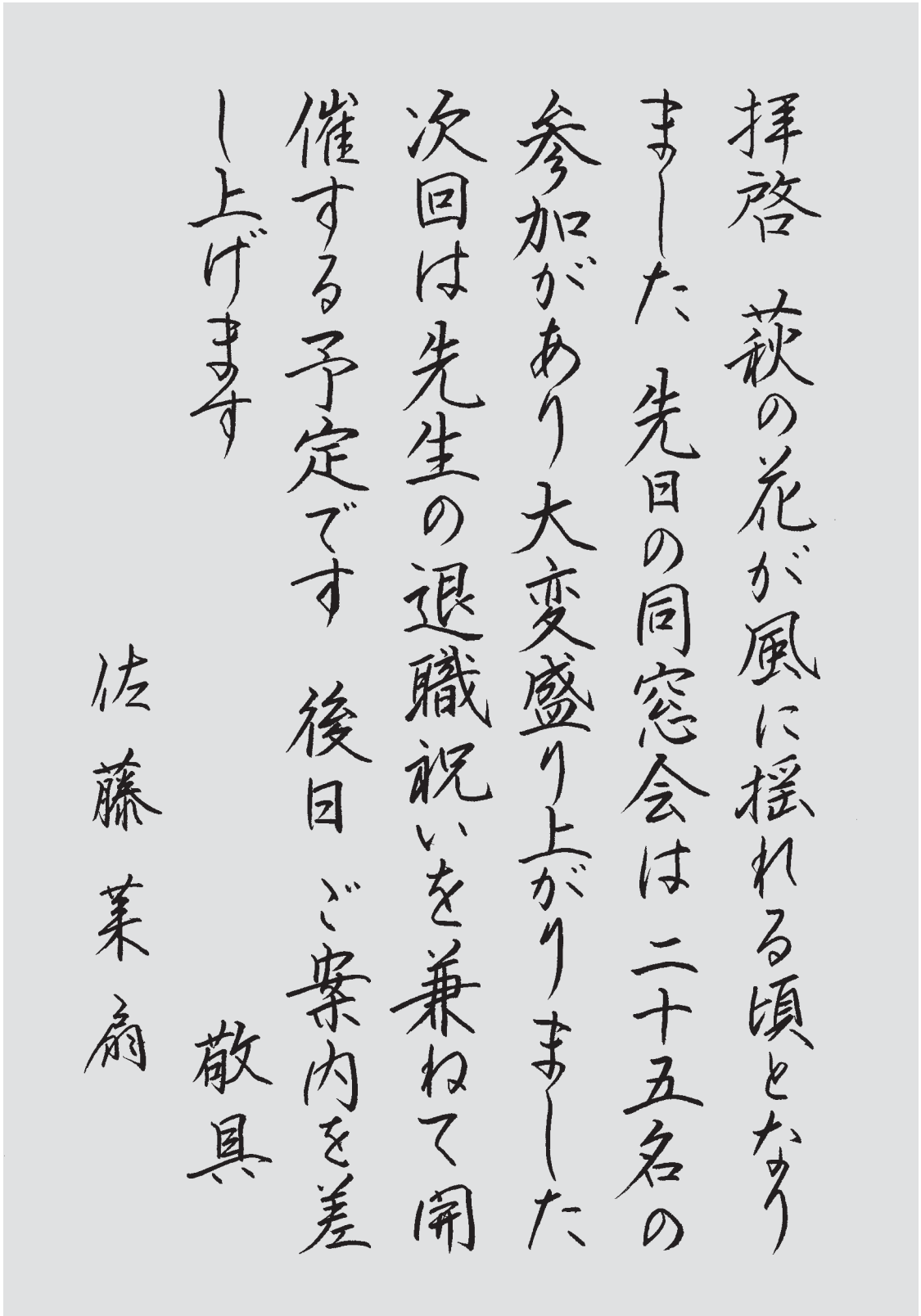
ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー（1807～1882）は、アメリカの詩人。表舞台に立たないヒーローが、私たちの世界を支えていてくれることを述べている。

「プラマン」というペン先がプラスチックでできた万年筆を用いて書いてみた。

筆記具の角度は、紙面に対して日本では一般的に60度、中国では45度がよいといわれている。ボールペンの場合は立てぎみがよく、つけペンの場合は、寝かせぎみがよい。鉛筆は前者、万年筆は後者の仲間である。

プラマンは、万年筆と似た味わいの線がでるので試してみるのもよい。

たとえ空が雲におおわれていても、太陽はその陰でいつも輝いている。
ロングフェローのことば　○○書




（掲載手本85％に縮小。原寸にするには117％拡大）

◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用　署名は各自の氏名（号）を
◇用紙は普通版半紙横½（24.5×16.5㎝）　B５版コピー用紙（26.0×18.1㎝）も可
◇所定の出品券を作品の右下に貼る

拝啓　萩の花が風に揺れる頃となり／ました　先日の同窓会は二十五名の／参加があり大変盛り上がりました／
次回は先生の退職祝いを兼ねて開／催する予定です　後日ご案内を差／し上げます　敬具／氏名

書体＝自由

佐藤莱扇書

# 今月のホープ作品・各部総評　NO.784

**かな部　師範　柳瀬　琇華**

他にも佳作が多かったが、この作品の緩急のリズムの自在さに注目した。大らかに風が吹き抜ける。

**◎かな部総評**　難しい文字もなかったので大方よく出来ていた。紙に対して字粒が大きすぎたり小さかったりは美しくない。（洋子評）



**漢字条幅部　師範　西川　藤象**

線の冴え、気脈の貫通から生まれる大小の変化が自然で美しい。芯が通っていて流れに揺るぎなし。



**◎漢字条幅部総評**　各体に挑戦された意欲作が多かった。紙面全体を掌握した上での運筆が大切。筆に余裕がほしい。（石雲評）

**かな条幅部　師範　菅原　澤花**

濃墨で筆先をうまく使い流麗でスピード感あふれる作。２行目「毛」は勢い余ったか、１画目一考。



**◎かな条幅部総評**　「を乎」「ゆ遊」の誤字が散見し残念。変体がなは必ずかな字典で調べ、正しい筆の行き先を確認しましょう。（孝予評）

**漢字部　師範　草刈　眞華**

どっしりとした安定感を醸しながら、墨の潤渇や点画の間の変化によって軽妙さも演出した快作である。

**◎漢字部総評**　行草体では点画の間や線の細太変化を、楷書体は参考古典の用筆を、篆隷書は点画の正確さを心したい。（蒼竹評）



**前衛書部　特選　相内　珠莉**

何より爽快さを感じさせる。淡墨の量感あふれる筆線、墨色の美、構成の妙、どれも素晴らしい。

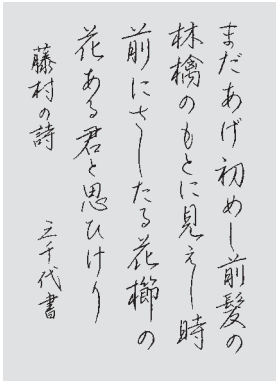
**◎前衛書部総評**　「線」は大切な表現要素のひとつ。古典を学び、前衛書の線を鍛えよう。（紅瑤評）



**ペン字部　師範　多胡三千代**

軽やかなペンのタッチで連綿が美しく、すっきり整う。文字の流れと行間が調和して精彩を放つ。

**◎ペン字部総評**　繊細な連綿の美しい作品に対し太線の作品もあり、時にはペンを変えて表現してみてもいいのではと思う。（富美子評）




**現代詩文書部　特選　畠中　成山**

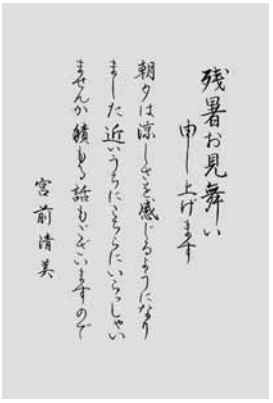
限られた紙面に大小の文字をバランス良く配置し、墨の黒が冴える。小書きのリズムが心地よい。

**◎現代詩文書部総評**　書の大事なポイントを少しでも多く取り入れた作品作りを望む。（邑峰評）



# 実用書優秀作品

選評　長島　僊雨




**特選　宮前清美**

自然な流れ、連綿がやさしく美しい。書き手を想像させる作。




**特選　加瀬明日夏**

楷書・単体ながら人目をひく存在感があり、力強さを感じる。

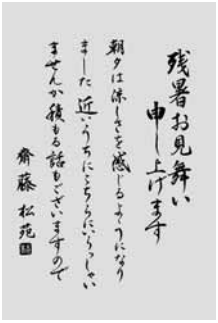
**◎実用書部総評**

馴染みある文章で日常に使えます。この辺から練習を重ね実際に手紙を出してみましょう。2～3字程度の連綿があると読み易く流れも出ます。

（僊雨評）

**今月の注目作**

**齋藤　松苑**




書き出し2行の大きさ墨量と本文の対比が佳。

| 特選 | | 秀作（60音順） | | 佳作（60音順） | |
|---|---|---|---|---|---|
| 上里正華 | 宮前清美 | 玉川千葉 | 今永咲子 | 春汀 | 池田美津子 |
| 上里 | 大澤よし子 | 大雲 | 大内熒軒 | 深大 | 石井光子 |
| 八街 | 村上佳月 | 清月 | 奥村美楓 | 日新 | 石橋嘉子 |
| 大雲 | 鷲山美梢 | 多賀やま | 木暮純子 | 立精 | 猪股白慰 |
| | | 澄春 | 齋藤松苑 | 猪股 | 久子 |
| | | 江龍 | 白鳥真智子 | 高真 | 梅山 |
| | | 八街 | 新行内芳蘭 | 青蓮 | 大町 |
| | | | 田玉哲子 | | 菜圓 |
| | | | 鶴見嘉美 | | |
| | | | 南雲洋子 | | |

| 入選（60音順） | | | |
|---|---|---|---|
| 啓佳 | 春日 | 裕子 | 宮子 |
| 深大 | 久下 | 香奈 | 有秋 |
| 若葉 | 工藤 | 山房 | 白珠 |
| たか | 猿渡 | 篁右 | 深大 |
| 若美 | 鈴木裕美子 | | 多胡三千代 |
| 立精 | 千田 | 白香 | 高原 |
| 吉岡 | 土井 | 孝子 | 梨秀 |
| たか | 浜野 | 永篁 | 丹 |
| 八街 | 松植 | 華泉 | 美枝 |
| 白扇 | 天野 | 白扇 | 四枝 |
| 千葉 | 安藤 | 叙孝 | 大雲 |
| 高真 | 岩上 | 郁子 | 積田 |
| たか | 浮須 | 康彰 | 雅雲 |
| 若美 | 梅澤 | 勝江 | 利守由佳理 |
| 橙園 | 鍵 | | 堺 |
| 樹原 | 葛 | | 誉田 |
| 白露 | 川上 | 恵子 | 上泉 |
| 華仙 | 菊地 | 恵美 | 中野恵美子 |
| こだ | 北爪 | 恵水 | 中村シゲ子 |
| 八街 | 小杉 | 悦子 | 深大 |
| 声香 | 小竹 | 紗香 | 永井順子 |
| 愛子 | 佐藤 | あこ | 麗澤 |
| 梓江 | 佐藤 | 祥扇 | 長谷川翠 |
| 竹原 | 代田 | 葉子 | 長谷川莉子 |
| 書泉 | 鈴木 | 谿琳 | 紅月 |
| | | | 林田幹子 |
| | | | 琇韻 |
| | | | 林美奈子 |
| | | | 誉田 |
| | | | 平野和江 |
| | | | 八街 |
| | | | 弘中桂舟 |
| | | | 大阪 |
| | | | 古川彩遥 |
| | | | 福島 |
| | | | 三村龍苑 |
| | | | 宗苑 |
| | | | 茂木絢水 |
| | | | 〃 |
| | | | 華仙 |
| | | | 山本美楓 |
| | | | 柳瀬琇華 |
| | | | 昆陽 |
| | | | 横山蘭舟 |
| | | | 米倉和枝 |
| | | | 八街 |
| | | | 渡辺節子 |
| | | | 竹美 |

（選外359名氏名略）

前衛書部（特選）　　現代詩文書部（特選）



選評　大平邑峰

絢水　運筆の呼吸深く大らか
彩香　筆の開閉自然で流れあり
珠葉　よく効いた線が空間に響く
雅邦　字群のバランスが絶妙
四峰　古典の香りを醸し出す
蒼風　大胆な空間処理が成功
喜代美　淡墨美しく情感を表出
祥舟　線質深く躍動感あり
藤象　横へ展開する筆遣い成功
光泉　詩のリズムを筆が奏でる
孝奎　文字の大小で句意際立つ
媛奈緒子　長鋒生かした立体的表現
雄一霞　淡墨が冴え、線も響く
紅　瞬発的な動きによる筆線
真理　句の情景を大事にした作
桃翠　ネバリある線で書き通す
美翠　宿墨か、独特の雰囲気あり
陽子　独特な滲みに工夫あり
和江　青墨美しく、滲みも成功
　　淡墨使い大胆に運筆した

選評　倉林紅瑤

彩紅　滲みと大胆な筆捌き絶妙
美紀　気迫に満ちた斬新な発想
恵弦　立体感溢れる墨色美鮮烈
千晶　筆勢とスケール大きな世界
邑里　長鋒筆の開閉が豪快に躍動
敦子　切れ味鋭い筆線が爽やか
美佐子　気迫漲る作、強靭な線圧巻
光泉　潤渇の変化大きな広がり
朱郷　力感・躍動感溢れる快作
有津　弧を描いた曲線が紙面躍動

# 今月の 特別研究部優秀作品（特選）

選評　小竹石雲　千葉蒼玄　半田藤扇　小島孝予

小品の部

前衛書（蓮紅）
本田美雪
「秋風」

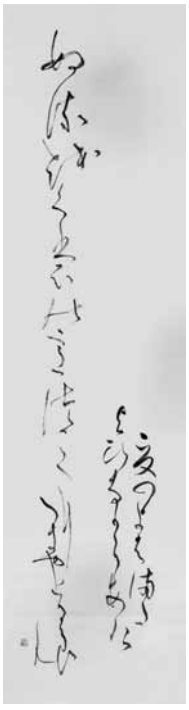


本田美雪書

135×30㎝

◆ふたつの造形をつなぐ側筆の線が生きた、テーマの秋風を感じる作品となった。多彩な線質の鍛錬が光っている。（蒼玄評）

かな（ＡＩ）
清水由紀子
「夏の夜は」



清水由紀子書

135×35㎝

◆大胆な散らしで、下部の5行が伸びやかにまとまっている。右上の余白が左上部の渇筆を引き立て、流麗で品格のある作品となった。（孝予評）

漢字（麗澤）
長谷川　翠
「雑詩十二首(陶淵明)」



長谷川　翠書

135×35㎝

◆七言二句を行草体で、穏やかに流暢に書き進む。余白が美しい無理のない自然体に、羊毛筆の柔軟で温厚な線が魅力を醸し出した。一貫性のある快作。（藤扇評）

現代詩文書（蓉花）
坂本蓉花
「カンパニュラの恋」



坂本蓉花書

138×35㎝

◆なんとロマンティックでお洒落な作品なのだろう。潤渇の明暗、数滴の雫、騒がしくない線の割れがほどよく調和しメルヘンティックな世界を醸し出している。（石雲評）

〈小品の部〉

創作の部（42点）
漢字―5点
かな―3点
現代―25点
篆刻―1点
前衛―8点
臨書の部（28点）
漢字―28点
かな―0点

総出品点数 70点

〈特選候補者〉

（創作の部）
「漢字」
花埜　高橋　清琳
「現代詩」
青蓮　熊谷　竹鈴
苑柚　若見　苑柚
宗苑　茂木　絢水
蓉花　澤　喜代美
蒼風　笹木　蒼風
玄穹　尾形　紅霞
白扇　天野　白扇
厚海　梅澤　七生
「前衛」
大拙　佐藤みえ子
四谷　新妻　弥生
大阪　湯原　希風
（臨書の部）
「漢字」
紅瑤　原島　春汀
千葉　安藤　叙孝
千葉　石川　晴洞
澄春　新行内芳蘭
眩耀　佐々木青霞
澄春　土屋　恵仙

# 大作の部

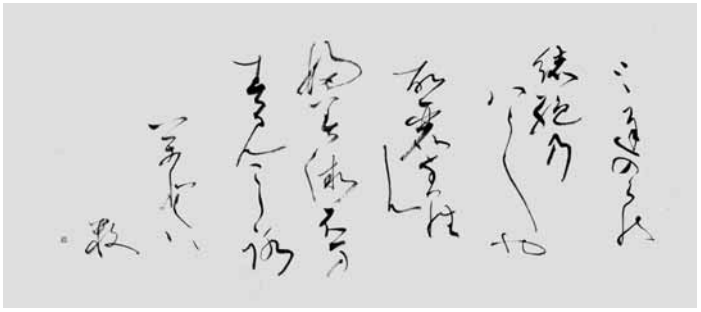
## 現代詩文書（もく） 西川藤象「与謝野晶子のうた」



西川藤象書　45×176cm

◆揺れ動く心を横形式で、行間に高低の変化をもたせて表現している。直線的な線に潤渇をからませることで、一層情趣豊かな作品に仕上がった。（石雲評）

## かな（創珠） 阿部珠翠「藤原道雅のうた」

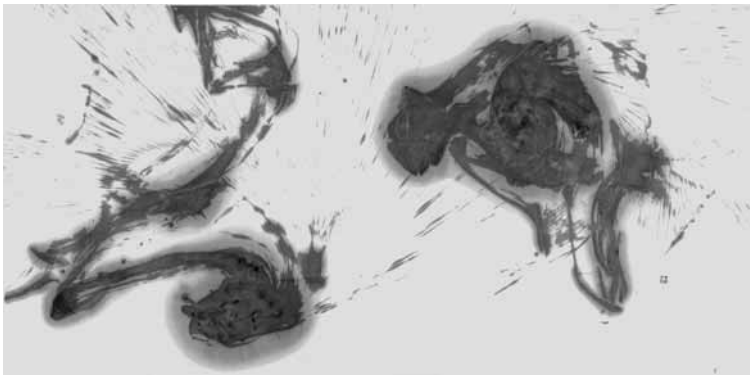


阿部珠翠書　53×118cm

◆リズムの良さが魅力。行間の変化と豊かな筆勢によって、爽快で躍動感あふれる見事な作品となりました。（孝予評）

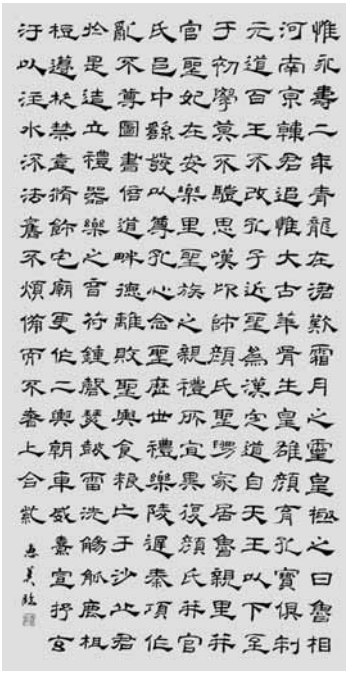
◆淡墨の美しい秀作。滲みの広がりが作品を幻想的に観せている。宿墨等、墨の研究が功を奏した。（蒼玄評）

## 前衛書（光風） 千葉光泉「奏（かなで）」



千葉光泉書　90×180cm

## 臨書（大雲） 舟賓恵美「礼器碑」



舟賓恵美臨　135×70cm

◆鋭く引き締まった気品と力強さが相まった、礼器碑の特徴をよくとらえた作。水平な横線と右に払う波勢が調和し、変化に豊んでいる。秀逸な絶品。（藤扇評）

〈大作の部〉
創作の部（34点）
漢字―3点
かな―3点
現代―10点
前衛―18点
臨書の部（18点）
漢字―17点
かな―1点
総出品点数 52点

〈特選候補者〉
（創作の部）
「現代詩」
四枝 伊藤 四夏
翠柳 加藤 紫翠
風書 遊佐 香風
誠和 石崎 甘雨
「前衛」
玄象 中島 正美
篤信 三浦 朱鳳
舎人 平塚 汀泉
一弦 道塚 紫音
紅瑤 廣田 紫
光風 千葉 光龍
月華 三塚 倫果
月華 相馬 朱郷
松風 西條 松雲
（臨書の部）
「漢字」
華祥 加藤 雅芳
大雲 日髙 右真
紅瑤 相澤 敦子
千葉 竹浪 叙舟
大雲 宮原 香扇
華祥 玉渕 良章
紅瑤 金井みどり
「かな」
菊月 新井 惠子



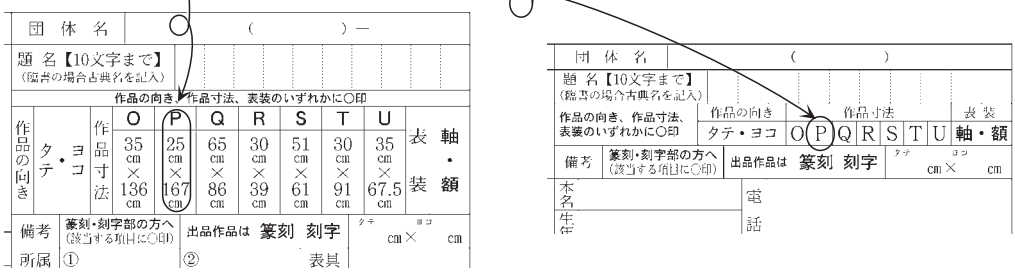
竹和山藍月若八　高倉若芳上梓京月香柳も一水も紫麗竹〃四恵若白城
美香陰水華葉街　真吉葉静泉江橘華書賢く葦茎く友澤原〃枝石葉珠内

横横森室三三丸松前本藤早波畠練西二永中中中中富出塚丹田田田田
山山下伏塚上浦本尾田間田部多山生　上福村野島島田口田　村邊辺中
　惠　　有　富　　川　　　　恵
蘭津健芽倫邦英祥希華士月　祥昌艸恭香藤一柳藤妙瑤里美美恵陽詠朱
舟子山衣果子樹芝子楓子華朗舟寿苑代柳翔琴明邑子翠子翠枝石子丹翠

## 第80回記念書道芸術院展出品目録の訂正について

9月上旬に作品募集規定と出品目録を発送いたしました。その中の一般公募用の出品目録に訂正がございます。

作品寸法 P については、今回からなくなりましたので、訂正いたします。




※Pサイズについては出品できませんのでご注意願います。

## ※ユネスコ登録記念ピンバッジについて

皆様の署名活動等のご協力により「書道」のユネスコ無形文化遺産登録が決定される見込みとなりました。2ページにある通り、記念のピンバッジが製作されることになっております。これを『書道芸術』購読者ひとりひとりに来年の春頃に配付する予定で準備しております。どうぞご了解願います。




## 訃報

**故 田子白嶺先生**

書道芸術院展常任総務
かな部・審査会員

令和8年8月10日（月）にご逝去されました。
享年79
謹んで哀悼の意を表するとともに心からご冥福をお祈りいたします。

# 審査会員の部　結果発表（出品数 漢字28点・かな14点）

選評　名越蒼竹・下谷洋子



新行内芳蘭



奥村　美楓

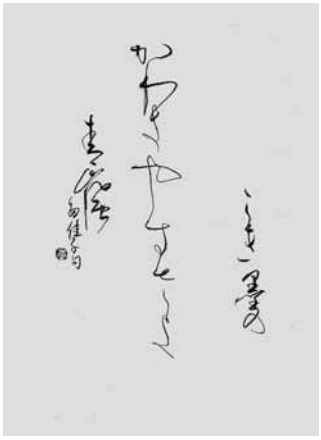
〈次点・50音順〉



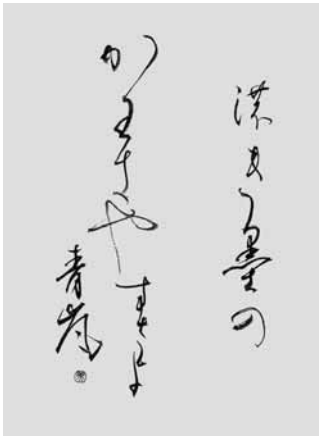
三浦　小樹



北嶋　菁湖



清水　蘭舟



奥村　美楓

**漢字秀逸作**

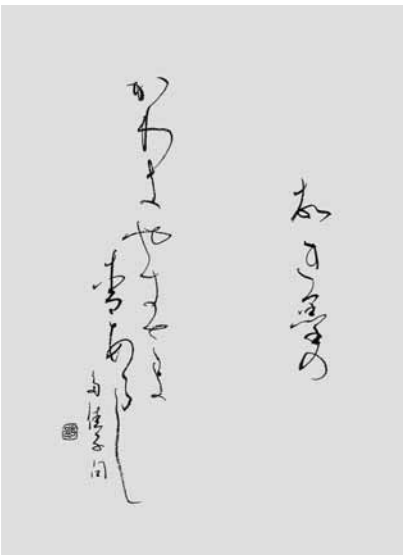


茂木絢水

運筆がスムーズで線に暢びやかさと安定感が感じられる。横画がやや同方向に見えるが、字画の疎密変化を取り入れ、章法を見事にまとめ上げた。

（蒼竹評）

**かな秀逸作**



齋藤杏邑

無理のない運筆で品がよい。2行目、単純な字組の単調さを連綿線の長短で工夫し、直筆の切れ味で貫く。行を寄せたため3行でも紙面が豊かになる。

（洋子評）

# 古典教則本　創作へのヒント(2)
## 形臨からの応用・発展例

# 『唐太宗・温泉銘』小林琴水

①臨書




②臨書




③倣書



④倣書



《解説》

敦煌の莫高窟に秘蔵された大量の経典や文書が1900年になり発見された。そこから見つかった唐時代の拓本が温泉銘である。手に入れたフランスの探検家ペリオによって自国に運ばれ、現在、パリの図書館蔵である。

王羲之の書を好み、多くの羲之の書を収集した、唐の太宗皇帝の書で、ゆったりとしたおおらかな筆遣いで皇帝らしい貫禄のある書である。①の「雪晨林寒」は、流れを意識しながら一筆一筆つながるように筆を運ぶことに注意した臨書。②の「先春年序」は、強弱と始筆に注意し、直線と曲線のバランスがとても難しいが、動きの大きい臨書をめざした。③の草書作品「為」は、臨書の技術を大字書に応用しての倣書。②の臨書「先」の1・2画目の大きな動きをここに取り入れ、伸びやかに大きく運筆し、線に変化をつけて書いた。④の「妙」も同じく大字書に応用しての倣書。線の変化と余白を考えて書いたものである。

書道芸術院
創立記念日

# 講演会・懇親会のご案内

記

日　時　令和8年11月23日(月)・(祝)

講　師　島谷弘幸（しまたにひろゆき）先生
（独立行政法人国立文化財機構理事長・皇居三の丸尚蔵館長）

昭和59年4月　東京国立博物館学芸部美術課書跡室
平成6年7月　同　学芸部美術課書跡室長
平成19年4月　独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館文化財部長
平成23年4月　同　副館長
平成27年4月　独立行政法人国立文化財機構　九州国立博物館長
令和3年4月　独立行政法人国立文化財機構理事長
（兼）九州国立博物館長
令和5年10月　独立行政法人国立文化財機構理事長
（兼）皇居三の丸尚蔵館長　現在に至る

演　題　「変遷する書」
ー時代の流れとともに、そして個人でもー

場　所・講演会　上野精養軒　3階「桐の間」
受付13時～　講演13時半～

懇親会　3階「桜の間」会費(無料)15時～

〒110-8715　東京都台東区上野公園4番58号
TEL：03-3821-2181

主　催　(公財)書道芸術院

定　員　先着120名

申込方法　下記申込用紙に氏名を記入の上、ＦＡＸまたは郵送で書道芸術院事務局にお申し込みください。

申込締切　令和8年11月13日(金)　厳守

FAX　03-3862-1957

# 参加申込書

※例年郵送していました参加申込書は郵送いたしませんので、こちらでお申し込みください。

氏名を記入の上、FAXまたは郵送で書道芸術院事務局にお申し込みください。
審査会員・審査会員候補・無鑑査・一般の方、どなたの参加も聴講無料です。

## 11月13日(金)　締切厳守

| 氏　名 | 氏　名 |
|---|---|
| | |
| | |
| | |
| | |

# 予告　2026・11月号（787）の「古典鑑賞」・「古筆鑑賞」の課題

（12月10日締切）

## 古典鑑賞　498

### 孔子廟堂碑（虞世南）②

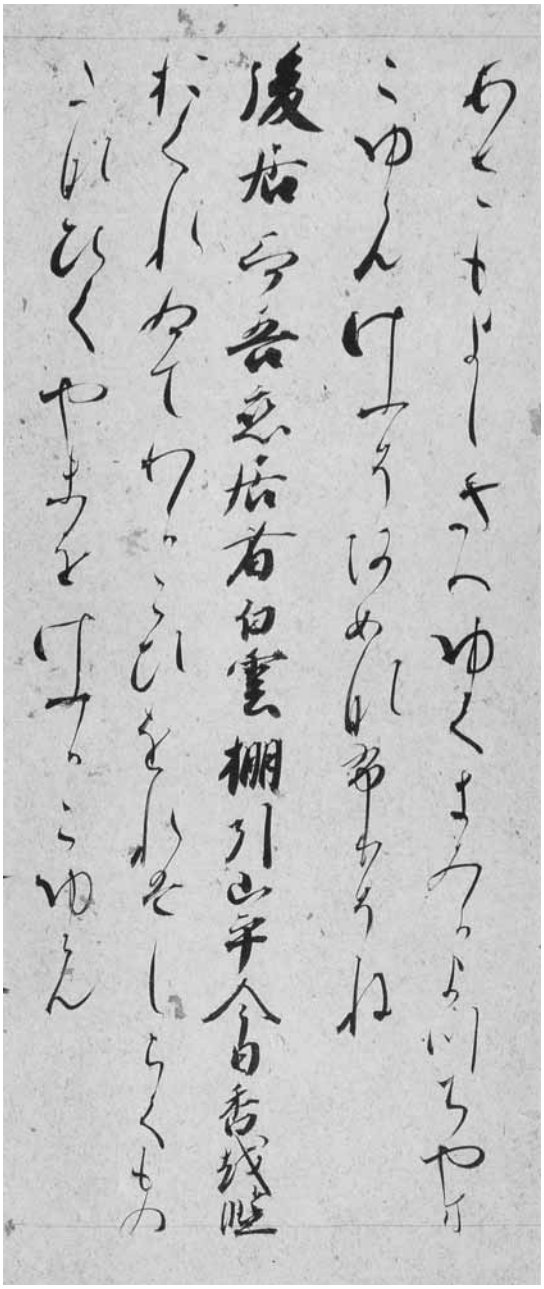


復質文殊致。進讓罕／同。靡不拜洛觀河。膺／符受命。名居域中之

（掲載図版・70％に縮小。
原寸にするには143％拡大）

## 古筆鑑賞　272

### 藍紙本万葉集（伝 藤原公任筆）②



〈よみ〉あさもよしきへゆくきみがまつちやま（久支可川万）／こゆらむけふそあめなふりそね（无曽阿那布利曽）／後居而吾恋居者白雲棚引山乎今日香越濫／おくれゐてわがこひをれば（於久礼乎）しらくもの／たなびくやまをけふかこゆらむ（多那久久可无）

（掲載図版・70％に縮小。原寸にするには143％拡大）


道の駅 硯上の里おがつ
学生展
書道展示会
作品募集
参加対象 学生さんなら誰でもOK
[保育園児・幼稚園児～大学生まで]
締切期限 令和8年11月 6日（金）必着
提出方法 下記へ郵送または持ち込み
〒986-1335 宮城県石巻市雄勝町下雄勝２丁目１７番地
一般社団法人硯上の里おがつ
会 期 令和8年11月30日(月)～令和9年1月16日(土)
午前9時～16時30分 ※最終日は１５時まで
会 場 道の駅硯上の里おがつ 雄勝硯伝統産業会館
作品規定 半紙/ひとり1作品まで
文字数・字句自由・近代詩文・一文書等可
各賞授与 大賞 / 準大賞 / 金賞 / 銀賞・・・他予定
主 催 一般社団法人 硯上の里おがつ／書道研究会玄宥社 千葉蘭玄
後 援 石巻市／石巻教育委員会／石巻日日新聞社／河北新報社／三陸河北新報社（石巻ゆかく）
申請中 公益社団法人日本書道連盟／公益社団法人宮城県書道協会／公益社団法人東北芸術院
高野山書道協会／毎日新聞社出版局
お問合せ 一般社団法人硯上の里おがつ
〒986-1335 宮城県石巻市雄勝町下雄勝２丁目１７番地
☎0225-25-6844 0225-61-3422


第38回
石心会
書道展
（テーマ）らしく－like
日時 令和８年11月６日(金)～８日(日)
(６日～７日は10:00～17:00、８日は10:00～14:00)
■ワークショップ（８日(日) 10:00～12:00）
～ 自分らしい作品を作ってみませんか ～
場所 岡山市灘崎文化センター
(岡山市南区片岡186) TEL086-362-1600)
後援 岡山市 岡山市教育委員会
山陽新聞社 毎日新聞岡山支局 (公財)書道芸術院
岡山県近代詩文書道連盟 書道研究書芸院
ご清鑑 ご高批賜わりますようご案内申し上げます
ご芳志は謹んでご辞退申し上げます
至 岡山
倉敷川
国道30号線
至 茶屋町
JR片岡駅より徒歩４分、駐車場あり
至 宇野
JR宇野みなと線
SHO JAPAN


2026 春洋会 書展
テーマ ――白と黒の美――
令和8年10月22日(木)～24日(土)
大阪産業創造館3F
書道芸術院展審査会員・審査会員候補・無監査
〈特別展示〉書道芸術院展 今年度新審査会員 大作
金延憲市 本田賀艸
第77回毎日書道展 受賞作品
ご高覧・ご指導くださいますようご案内申し上げます。 会長 小林琴水
主催／春洋会 後援／毎日新聞社・(公財)書道芸術院

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和八年九月二十五日　印刷
令和八年十月一日　発行
（毎月一回一日発行）　書道芸術　第七八六号

# 競書出品規定

**※規定部・自由部・研究部は、月別出品券を貼ったバーコード出品券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。**

**※特別研究部は所定の出品券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。**

**※半紙は縦使用に限る。**

**※落款（印のみも可）を入れる。**

## ●出品資格　高校生以上

## ●月例競書作品出品の心得

1、**締切日必着厳守**

2、月別出品券を貼付していないバーコード出品券は認めない

3、月別出品券のコピーは不可

4、㈠**初めて**出品のときは「**10級**」と書く

㈡「課題違反」・「落款なし」等の違反作品は審査対象外とし、**違反作品として氏名を掲載します。**

**※▲印段級誤記入**

**※△印作品審査後着**

＊段級欄に記入する数字は、級位は算用数字1、2、3…段位は漢数字　初、二、三…で書いてください。

＊級位の方は、出品する月の本誌（最新号）で成績を調査確認の上、級を記入してください。確認できないときは、**現在級を書き「未調査」**と明記してください。

## ●規定部（自分の段・級で出品）

| 部門 | 漢字 | | かな | | 漢字条幅 | | かな条幅 | ペン字 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 段級位 | 初段以上 | 秀級以下 | 初段以上 | 秀級以下 | 初段以上 | 秀級以下 | 10師～10級範 | 10師～10級範 |
| 用紙 | 半紙 | 半紙 | 半紙 | 半紙たて½ | 半切 | 半切 | 半切 | はがきサイズ |
| 書体・内容 | 創作（書体自由） | 創作（楷書） | 創作 | 臨書 | 創作（書体自由） | 創作（書体自由） | 創作 | 書体自由 |

・かな、かな条幅部門は料紙使用可。

## ●自由部（段、級によらないもの）

| 部門 | 前衛書 | 現代詩文書 | 実用書 |
|---|---|---|---|
| 用紙 | 半紙 | 半紙 | 左記 |
| 内容 | 創作 | 創作 | 書体自由 |

〈実用書部門・出品規定〉

○用紙　半紙横½（24.5×16.5㎝）、B5コピー用紙（26×18.1㎝）も可。

○課題　掲載語句を書く。

○小筆、筆ペン、サインペンも可。

## ●特別研究部

・大作または小品のどちらかに1点出品する。

・詳細は出品票の掲載ページを参照のこと。

## ●研究部（掲載課題の臨書）

| 部門 | 用紙 | 内容 |
|---|---|---|
| 漢字研究 | 半紙 | 文字数自由 |
| かな研究 | 半紙 | 歌1首以上を書く、全文も可 |

・掲載部分以外の箇所は不可。

・かな研究部門は料紙使用可。料紙貼りつけも可。

## ☆審査会員の部について

・「漢字部門初段以上」と「かな部門初段以上」に審査会員のみが出品できる部を設ける。

・バーコード出品券の段級欄に「審査会員」と記入する。

・通常の競書との重複出品は不可。

## 送料

1か月の購読部数が1部～9部までの1回の郵送料

| | |
|---|---|
| 1部 | 79円 |
| 2部 | 95円 |
| 3部 | 103円 |
| 4部 | 119円 |
| 5部 | 135円 |
| 6部 | 151円 |
| 7部 | 167円 |
| 8部 | 183円 |
| 9部 | 199円 |

10部以上は送料免除

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は
〒101-0031
東京都千代田区
東神田1―16―7
東神田プラザビル3階
**公益財団法人 書道芸術院**
電話（03）3862―1954
FAX（03）3862―1957
ご連絡等は**月曜日～金曜日　10時～16時**の間にお願いいたします。（土・日・祝日は休み）

令和八年九月二十五日印刷
令和八年十月一日発行
定価　1部　七五〇円
編集兼発行人　下谷洋子
データ処理　株式会社リンクス
印刷　小沢写真印刷株式会社
発行所　公益財団法人　書道芸術院
〒101-0031
東京都千代田区東神田1-16-7
東神田プラザビル3階
電話（03）3862-1954
FAX（03）3862-1957
振替　00150-4-135058
ホームページアドレス　http://www.lincs.co.jp/shogei/